

リハビリテーションの最前線で活躍する 患者にも医療スタッフにもやさしい理学療法機器

ミナト医科学 株式会社

数ある医療用機器の中でも、理学療法機器を主体に開発・製造を行っているミナト医科学。特に、リハビリテーション用機器に強みを持っています。高齢化の伸展と相まって、これらの機器は年々需要が高まっており、同社製品の活躍の場は広がりをを見せています。今回は社長の津村恵彦氏にお話を伺ってきました。

やさしさで、医療を科学する…
MINATO



ミナト医科学 株式会社

代表取締役社長：津村 恵彦 氏
本社：大阪市淀川区新北野3丁目13-11
創業：昭和32年5月23日
社員数：420名
事業内容：医用電子機器、
リハビリ機器の製造販売

ミナト医科学の誕生

弊社は蓄膿薬で有名なミナト製薬の医療器部門としてスタートし、昭和32年に独立しました。当時は、医用電子機器というジャンルはあまりメジャーではありませんでしたが、創業者の湊謙正氏が筋麻痺の治療に使われる低周波治療器を開発したいと志し、新たな事業を始めるきっかけとなりました。創業当時は、低周波治療器や聴力検査機器を手がけ、世に送り出しました。



←ミナト製薬の「ミナト式点鼻薬」見覚えのある方も多いのでは
↓創業時に売り出した低周波治療器



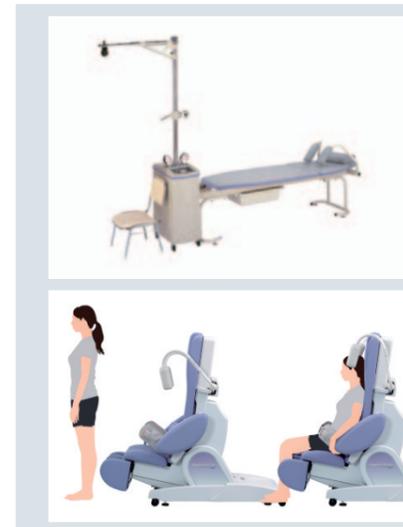
リハビリ機器で予防医学に貢献

事業のターニングポイントとなったのは呼吸機能の計測装置の開発でした。当時は公害病が流行し、じん肺問題に対応した製品の開発が求められました。先代の社長である寺田英史氏が、主となり開発を進めた結果、学会レベルでも非常に高い評価をいただき、日

本エム・イー学会（現、日本生体医工学学会）の研究奨励賞を受賞しました。この製品には他社が真似できない独自の計測技術が組み込まれています。

もう1つ、医療用牽引機のコア技術に強い思い入れと自信があります。およそ15年前、牽引機と言えばベッドに横たわった患者の腰を締め、ワイヤーを引っ張る方式でした。この方式ですと、患者と医療スタッフの双方に負担がかかります。これを改良し、弊社は患者が椅子に座るだけで自動的に牽引できる機械の開発に成功しました。腰痛で悩む患者に負担をかけずに牽引治療できる物理療養機器「スーパートラック ST-2L」は、平成20年にグッドデザイン賞を受賞しました。医療スタッフも従来のように患者様ごとにアームの調節をする必要がなくなり、よりスムーズな治療が可能となりました。

現在、椅子型牽引機を生産しているのは弊社を含め2社のみで、弊社の製品シェアは市場の70%を占めます。製品をリリースし始めた頃は、知的財産保護に対する意識が希薄だったこともありますが、特許をとらずにいると、リリースから3年後に別のメーカーが同じタイプの椅子型牽引機を発売しました。当時の経営幹部の考えは模倣品を阻止することより、“他社が真似をする＝これから椅子型牽引機が市場で支持される”ことを重視していたのです。結果的には、これが功を奏しました。



■患者様にも医療スタッフにもやさしい高機能を実現

従来の牽引機「トラックタイザー」は①腰装具を装着し、②ベッドに横たわり、③三角脚台装着、④ワイヤーを接続し、ようやく治療を開始していましたが。新しい牽引機「スーパートラック」は①患者様が椅子に座り、②腰ベルトを装着すればすぐに治療を開始できます。ベルトも金具をバックルにはめ込むだけで自動的に巻き取りし、牽引パターンと連動させることで過度な圧迫を避け、快適な治療を提供します。また、音声で動作説明の案内がされます。セッティングの工程が短くなったことで、忙しい医療スタッフの時間短縮に貢献しながら患者様への負担も和らぎます。

お客様に信頼され支持される 商品提供の土台づくり

弊社には開発委員会が常時設置されており、社長や役員、開発責任者など、およそ10名で構成されています。そして、いつ、誰でも製品に関する提案ができる風土が根付いています。今年創業60周年ということもあり、記念提案キャンペーンを行った結果、300件を超える提案がありました。これからは社員が継続して提案をあげられるよう、展示会や専門の学会に積極的に参加させるなど、情報収集を後押ししていきたいと考えています。

産学共同開発で 最新のニーズをキャッチ

商品が多彩である分、開発のきっかけも実にさまざまです。自社内の発案のみならず、近隣の大学と産学共同研究という形で取り組んでいるものも多いです。また、大学病院から、「こんな治療をしたいのだが、どうだろうか」といった相談を受けることも多々あります。その一つが名古屋大学と共同研究をした低周波治療器です。これは術後の早期離床のために、ICUに入っている段階から電気を使い筋肉を収縮させることでリハビリを行います。高齢者や慢性心不全の患者様には、骨格筋機能が維持できるような電気刺激を長時間行うことが困難でしたが、電気刺激方式を研究し、新た

な低周波治療器を開発しました。理学療養機器を用いた治療は薬品を用いないため、副作用もありません。それがニーズを大きくするひとつの要因です。これからも、リハビリテーションの総合メーカーとして、このような超早期リハビリから高齢者の維持期リハビリまでシームレスにカバーしたいと考えています。



グッドデザイン賞も受賞した手術後の「早期離床」を目的とした低周波治療器ソリウス (SOL-1)

ベンチャー企業精神の背景

弊社の特徴として、経営層と社員の距離が近いことが挙げられます。二代目社長からはオーナーではなく、社員から選ばれています。私自身、40年前に入社試験を受けて新入社員として入社しました。オーナーが株を所持しているのではなく、全て社員の持株で、在籍期間以外は株を持つことができない内規になっています。オーナーと社員という関係ではなく、社員の代表が社長として経営している感覚です。同期入社仲間が現在経営層として一緒に会社を運営しています。



津村社長とご一緒にインタビューを受けてくださった常務取締役の小座間氏（左）。長きに渡りに切磋琢磨してきた仲間ならではの気安さを感じました。

10年先、20年先を見据え…

これから、日本はもとより世界各地でまだまだ高齢化が進んでいきます。医療そのものは、これから癌などの先端治療を主とする高度医療と健康寿命を延ばす二つの部門に分化すると考えられています。弊社はリハビリ医療をはじめとする各現場からの新たなニーズを汲み上げ、次の開発に活かします。とりわけ、介護予防にフォーカスを当て、健康寿命の延伸に貢献し続けるトップメーカーでありたいと考えています。また、今後はヨーロッパにマーケットを展開するつもりです。海外にはまだ理学療法機器メーカーは少なく、事業参入のチャンスは十分にあります。製品の細やかさと技術力でグローバル競争に打ち勝てる、Made in Japanらしいものづくりを追求し続けます。

貴重なお話をいただき、誠にありがとうございました